

バンングラデシュ農村における生活の成り立ち 自給と“共”的な資源利用の価値をみる―変わるものと変わらぬもの

吉野 馨子 東京大学大学院

バンングラデシュは、ヒマラヤを源とするガンジス川(パドマ川)、チベット高地を源流とするブラマプトラ川(ジャムナ川)および、インドのマニプールとミゾラムの山岳地帯を源流とするメグナ川という三つの大河川が形作る巨大なデルタの河口部に位置する(注一)。川といっても日本の川とは規模が違い、向こう岸が見えない幅広さである(写真上)。また、雨季には上流からの水が増し、氾濫し、村々を水の下に沈ませ、毎年国土の約三分の一が水の下に沈んでしまうという(注二)。そのような水環境下では、人々は、屋敷地を高く土盛りすることによって、湛水を免れる生活空間を確保している(写真下)。

バンングラデシュは日本の約四割の面積に、日本と同じ程度の人口を維持しており、また人口の約七割が農村に住むといわれる。そのため、一人当たりの耕地面積は十坪に満たず(耕地を持たない世帯も一割を超える)(注三)、農業だけで生計を立てられる世帯は少ない。警察や軍隊、学校の先

生などの常雇いのほか、小商い、リキシャや台車引き、土方仕事(とくに、雨季に湛水しない土地を確保するための土盛り作業が盛んである)、織元の織り子、その他網作りなどの内職等、たいいての世帯で何がしかの農外収入源を持ち、生計を支えている。数多くあるNGOも重要な雇用先である。また、海外に出稼ぎに行っている人も少なくない。兼業農家の国といえるだろう。

筆者は、一九八八年に初めて訪問して以来(ちなみに一九八八年は大洪水のあつた年で、首都ダッカも含め全国に多大な被害をもたらした)、農村の屋敷地を中心として、村における自給的生産を見てきた。前述のように雨季には湛水してしまふ地域では、道路と屋敷地が唯一陸地として残されるため、屋敷地は、生活の場としてのみならず、生産の場としても重要である。また、イスラム教徒が国民の大半を占めることもあり、女性にとつて屋敷地は唯一自由に動ける空間でもある。

村人たちの関心は現金収入に集まるが、屋敷地

では、日々の生活を支えるさまざまな活動が営まれており、その重要な担い手は女性たちである。本稿では、私が見てきた二つの村(マイメンシン県K村―旧ブラマプトラ川の自然堤防に位置、および、タンガイル県K村―ジャムナ水系の氾濫原上に位置)を中心に、村での生活の成り立ちについて、とくに自給的、非換金的な部分に注目してみたい。

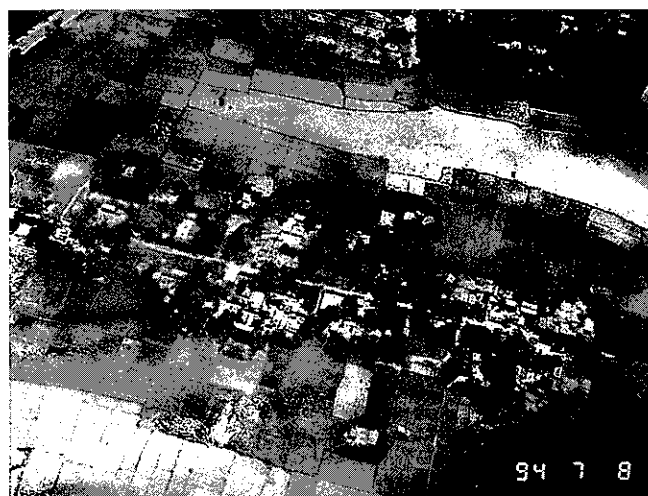
農村における生活の存立―住居と食の確保

住む場所の確保

近年では、医療や教育等(娘をもつ世帯では、年々つりあがる結婚持参金品―ジョウトック―も頭の痛い問題である)、現金を必要とする場が増えてきているが、貧困世帯が最低限自分の生活を村で成り立たせるには、住む場所の確保と日々の食の確保がまずは重要である。



ブラマボトラ川を渡るフェリー



湛水し始めた村、こんもりとした緑に囲まれた区画が屋敷地

前述のように、農村住民の大多数は、何がしかの現金収入源を持つており、農村で生活を維持することと農民であることは必ずしも同義ではない。農業収入で生活を維持できなくても、とりあえず自分の居住空間（＝屋敷地）が確保できれば、何がしかの現金収入を得る機会が得られる可能性は高い。そのため、まずは自分の住む場所を確保することが、村で生活する重要な要素となる。

土地は基本的に兄弟間で均分相続されるため（女性も、法的には兄弟の半分の面積を手に入れ

る権利を持つが、たいていは放棄している）、世代を継ぐごとに土地は細分化されていく。しかし、屋敷地は、一世帯当たり少なくとも住居を建てるだけの広さは必要であり、細分化は、できるだけ遅らせられる。どうしても屋敷地がせまくなり出て行かなければならないときや、村の外から移ってきたときなどは、他の村人たちも、土地の確保（雨季の湛水を免れるための土盛り用の土地も含む）などに協力することも多い。たとえばD村では、村外から移動してきた人が、村の有力者の支

援を受け、住居が建てられるくらいの屋敷地を借り、などの事例が見られている。

食材の確保

前述のように小規模な農家が多いため、主食となる米も自給のみで賄える世帯は多くない。一九八六年にバングラデシュ農家大学がK村で行った調査では、六割以上の世帯が米を購入していた（注四）。スパイスやダル（レンズマメ、ガラスマメなどの豆類。ダルスープは、私たちの味噌汁に相当するような基本的な料理である）もほとんどが購入されている。かつては、乾季の畑作物として、油糧作物のナタネや、ダル、玉ねぎ、ニンニク、コリアンダーなどのスパイス類が栽培されていたが、乾季の灌漑の普及によって、ほとんどが稲にとつて替わられてしまった。

屋敷地からも多様な食材が提供される。D村では、雨季の氾濫のために永年植物は主に屋敷地でしか生育できない。中でも果樹は、果実を食べる以外にも、木材、燃料、飼料、葉など多様な目的に利用される。

また、屋敷地は、トルカリ（おかず、というよな意味）と呼ばれる伝統的な野菜の主要な生産地であり、自家利用を第一の目的として栽培される。牛、水牛、ヤギ、羊、鶏、アヒル、ハトなどの家畜も屋敷地で飼養される。これらは主に女性によって管理されている（写真9ページ）。また屋敷地を土盛りした後には作られる穴に水を溜め、魚

を養殖することも盛んになっている。

そのほか、村内のオープンアクセスな資源の利用もある。氾濫期には、耕地が湛水するが、そこでの漁業は誰でも行つてよい。また、耕地に生える野草は、貴重なビタミン源となる。また、果樹の中でも、インドナツメなど、経済性の低いものは、子どもたちが勝手に取って食べている。また、屋敷地の植物資源は、多くは自分の屋敷地から、あるいは購入、または親戚などからのおすそ分けが多いが、換金性が低いもの、あるいは普通に見られるものは、隣近所からの分け与えも見られる。

燃料の確保

食の確保に当たっては、燃料の確保も重要な要素となつている。屋敷地は、基本的に住居や調理小屋、家畜小屋などの建物のほかに、作業空間のウタンと裏手にジョンゴル(藪地)を備えている。ジョンゴルは、燃料源として重要な場所であるが、氾濫原上にある農村では人工的に作り上げられたものであるし、面積もあまり大きくない。また、世代を継いだ土地の細分化や建物の増加等により、世帯当たりのジョンゴルの面積も減少し続けている。

そこで、多様な農業副産物が燃料源として利用されている。牛糞は中でも重要な燃料源である。牛糞は堆肥源としても重要であり、燃料の利用は、競合関係にある。繊維作物のジュートの副産物である芯は、熾き火から火をつける時には不可欠

であり、村人は、ジュート芯を手に入れるために栽培しているほどである。このほか、ワラ、糊殻などの農業副産物、落ち葉、竹の根、さらには牛にやつた飼いの葉の残りや水生植物のホテイアオイまでもが乾かして利用されており、まさしく入手可能なありとあらゆるバイオマスが利用されている。近年は、薪などが市場でも手に入るが、それらを購入できるのは、経済的に余裕のある世帯に限られる。

貧困世帯では、子どもや女性が、時間のある限り、燃料集めに時間を費やしている(写真下)。道端を歩いて落ちていいる牛糞を拾う、街路樹など、個人所有でない樹木の落ち葉を集める(個人所有の土地であっても、不在がちな場合は、同じように他の村人が集めている)。また、耕地に残された落穂も重要な資源であり、とくに長いワラが取れるアマン稲(雨季に栽培される感光性の稲で、在来種は長かんである)の落穂(ナラ)は、重要な燃料源である。ナラも本来は田んぼに置かれ、堆肥源として利用されていたのだが、次第に燃料として用いられるようになってきた。牛糞と合わせ、耕地の肥沃度と燃料の確保は重要なトレードオフの関係になつている。また、収穫後の調製作業も、女性にとつて燃料を手に入れる重要な機会となる。男性が調製作業を手伝うと、賄いと賃金をもらうが、女性の場合は賄いに加えてワラなどの残渣をもらうことが多い。燃料源をもらうために作業をしているようなものである。

貧困層の生活とオープンアクセスな資源

前述のような水環境のため、デルタ内の村々においては、ほとんどの土地は何かしらの手に入れた場所であり、共有地と言える場所は、内水面を除いては、道路や学校、墓地、定期市の場程度に限られる。

水面積が国土の一割近いバングラデシュでは、内水面は、重要な共有空間である。とくに雨季になると、屋敷地と道路を除いて、ほとんどの地域は内水面となる。古くから、この時期、水田も含め、魚は誰の土地でも自由に入つて取つてよい、とされてきた(注五)。バングラデシュでは全漁獲量の八割が内水面から、またその八割が開放水域(河川や氾濫原、池沼など)からのものであるという(注六)。また、内水面では、ジュートを洗うなど、さまざまな仕事にも用いられるし、水運は重要な輸送の手段であった。

また、燃料集めのところで述べたような、私有地に関わらず、落ちていいるものは拾つてよい、という慣習は、自分の資源を持たない貧困層の生活の存立に大きく役立っている。たとえば、稲刈り後の田んぼにおける落穂拾いやワラの持ち去りとくにアマン稲のワラ(ナラ)は重要であり、燃料源が不足するにつれ、争奪戦が熾烈になった。その田んぼの持ち主も当然利用したい。収穫後そのままにしておくとも田んぼの持ち主が利用することになるので、燃料源に事欠く世帯では、収穫し



種子採り用のユウガオの実を抱える女性

たその日の夕方や夜にナラを持ち去るようになってたという。つまり、ナラについては、田んぼの持ち主も含めて、公平な競争が行われていると言えるだろう。

変わるものと変わらないもの

バングラデシユの農村を調査フィールドにしてから、六年ほど行かない期間があり、二〇〇四年よりまた再び訪問を始めた。

この六年間の間に、自由貿易地区をはじめとした縫製業の隆盛(農村から、多くの未婚の娘たちがダツカなどにある縫製工場に働きに出るようになってきた)、海外出稼ぎの更なる増加などの変化を感じた。バングラデシユ全般の繊維産業の好況は在村のサリ産業にも好況をもたらしているようであった。一方、海外出稼ぎ等の増加からは、若者がもはや村を見ず、外に出る機会を絶えず求



道端に落ちた牛糞を拾い集める女の子たち

めているようにもみられた(海外出稼ぎ者は全国で二十五万人を超え、送金額は、国全体の輸出総額の45%に相当する—二〇〇三〜〇四年度実績)。農業で大きく変わったのは、牛耕が著しく減少したことである。D村では、五百あまりの世帯のうち、三世帯に一世帯程度はいた耕作用の牛が、今では、村内にある四つの集落ごとに一、二世帯くらいしか牛耕に用いられていないという。その代わりにパワーティラー(耕うん機)が耕地を動き回っていた。パワーティラーは各世帯が所有し

ているのではなく、たいていは、経済的にゆとりのある世帯が購入したものを、雇用されたオペレーターが運転している。田んぼの所有者は、耕うん代を支払うという形である。

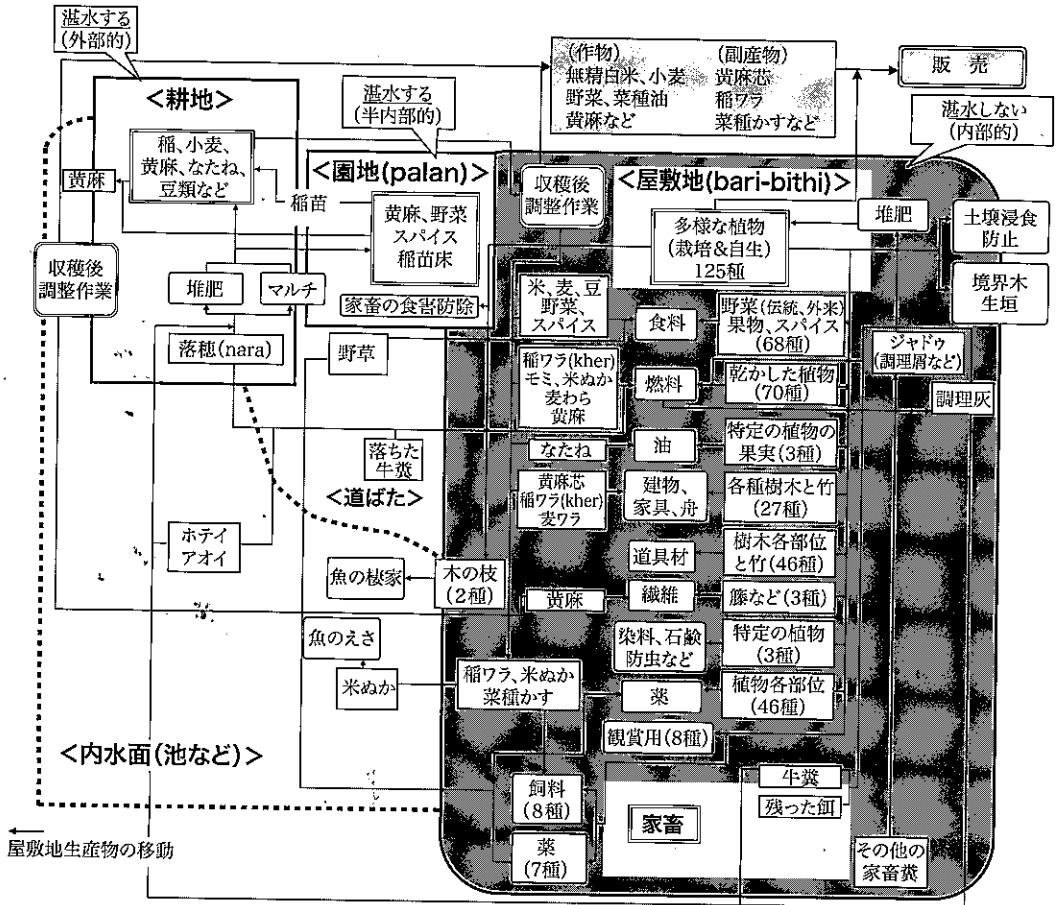
牛耕に用いなくなったため、牛を飼う世帯も大きく減少している(全国で、牛を飼養する世帯数は、一九八四年の約二千万世帯から一九九六年には、八百万世帯ほどに減少)。また、稲の品種は、改良品種が主流を成し、かつてのような長い稲ワラは手に入りにくくなっているようである。

これらの変化は、村でのパイオマスの確保と利用にも大きな変化をもたらしている。

私が以前調査していた頃より、牛の飼養は徐々に減少していた。パワーティラーの普及のほかに牛が十分な利益をもたらす前に死んでしまうことも多く、コストに合わないという面もあったようである。また、屋敷地の細分化もすでに進んでおり、屋敷地の植物等からは十分燃料を確保できない状況になっていた。これら二つの要因は、「燃料の不足」↓「牛糞やナラの燃料としての利用」↓「牛糞やナラの、堆肥としての耕地への利用の減少」という変化をもたらしていた。そして灰分の補充には、当時潤沢にあったホテイアオイが利用されるようになっていた。

六年を経た現在、前述のように、牛耕の顕著な衰退は牛の飼養頭数を著しく減少させ、堆肥源としてはおろか、燃料源としても不足ある状況となった。また、牛糞を入れたかごの下に溜まる細か

図 D村資源循環



出典:Yoshino,1997(注7)を改図

いかけら
は、屋敷
地で育て
られるト
ルカリ
(伝統野
菜)の栽
培に欠か
せないも
のであつ
たが、そ
れにも与
えられな
くなり、
乾季の重
要なトル
カリであ
るユウガ
オなどは
ほとんど
取れなく
なつてき
たという
(ユウガ
オは化成
肥料では
うまく育
たないと

考えられて、化成肥料の適切な与え方ができ
ていないからだという人もあるが)。トルカリも
たくさん実がついていた頃は、市場に出しても余
るほどであり、隣近所などに分け与えることもあ
つたというが、現在では、自家利用にも足りない
状況になってしまつてゐる。アマン稲も、改良品
種の普及により、以前のような長いナラが少なく
なり、これまでオープンアクセスの燃料源として
重要であつた牛糞とナラの双方が不足するようにな
つてゐる。そのため、燃料に事欠く世帯では、
落ち葉を主要な燃料源とせざるを得ない。このた
め、以前は鬱蒼とした感のあつたジョンゴルは、
間を置かない落ち葉かきのために下生えも育たな
くなり、すっかり開けた薄明るい空間になつてい
た。もちろん自宅の落ち葉で足りるはずもなく、
街路樹などの落ち葉も重要な燃料源となり、あち
こちにかき集めた落ち葉の小山ができる。
ファームिंगシステムの变化は、その变化の主
目的である当該作物の変化をもたらすばかりでは
なく、そこから副次的に生まれるさまざまな流れ
に変化を与える。図は、氾濫原に位置するある村
の資源利用の循環を图示したものである。栽培す
る作物の変化は、たいがい経済的なインセンテ
イブにより意識的にもたらされるが、副次的な流
れについてまでは、十分な注意が払われない(内
水面での自由な漁労についても、洪水制御を目的
として実施されたFAP (Flood Action Plan)
の区画化プロジェクトにおいて、その小区画内の

地主が稚魚を放流し、これまで自由に認められてきた他者の魚取りを禁止する事例も見られるといふ(注八)。その副次的な流れは、多様な資源を生み出し、多様な目的に利用されている。日々の生活に直接的に利用されている部分も多く、お金の力からない、目に見えにくい流れであり、それはまた女性が主に担う部分であることが多い。その一方で、利用できる資源量が減少する中でも、オープンアクセスの原理が生きていることは注目すべきことだろう。また、屋敷地でも経済性の高い樹種が選ばれる傾向がある中で、かつてのような、「普通の有用植物」を隣近所から分けとらうことも依然、普通に見られている。稠密な人口から、「わずかな資源の奪い合い」(Competition for Scarce Resources)(注九)と評されるバングラデシュ農村でも、このように他者のために残しておく部分が置かれている。ただ、資源の共有的管理というよりは、私有地におけるオープンアクセスな資源利用が主である。

「私有」が完全な形では主張されず、それが、とくに自分の資源を持たない人々の生活の存立に役立つてきた。それは、毎年訪れる洪水が、人々に土壌の肥沃度や漁場などの恵みをもたらす一方で、ときとして大きな破壊をもたらすという、大きな自然の力との関係性から作り上げられてきたものかもしれない。今後、さらに私有の資源が細分化されていくとしたならば、このような「共」的な資源を、意識的に維持し、また新しく作り上げていくことも重要となっていくだろう。

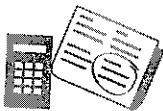
【注】

- 注一：岡太郎 二〇〇四年 バングラデシュの洪水災害 京都大学防災研究所年報 四七号 六二〜六三頁
- 注二：B・L・C・ジョンソン 一九八六年 南アジアの国土と経済 第二巻 バングラデシュ 二宮書店 三七頁
- 注三：Bangladesh Statistical Yearbook of Agricultural Statistics of Bangladesh 二〇〇四年
- 注四：Bangladesh Agricultural University of Bangladesh のロジエクト対象村での原データより筆者が算出
- 注五：内田晴夫 一九九八 バングラデシュの洪水対策事業FAPと内水面漁業 日本熱帯生態学会ニューズレター 三二号 四頁
- 注六：同上
- 注七：Yoshino, K. 1999. Subsistence Agriculture and Women: Kitchen Gardens in Bangladesh and Japan. 11th International Conference of Women Engineers and Scientists. 内田前掲書 七頁
- 注八：Jansen, 1986. Rural Bangladesh: Competition for Scarce Resources. University Press.

行政マンの条件

石川善朗 著
ISHIKAWA, Yoshio

公務員制度改革時代
を乗り切る
プロフェッショナル行政マン
の条件とは!?



●四六判・202頁 ●定価1575円



【本書の主な内容】	
プロローグ	あるイベントの教訓
第I部	行政マンの意気と力を高める「志」
1	モチベーションと「志」
2	「志」を支える常識
3	プラス思考が育てる「志」
第II部	行政マンに必要な「技術」を磨く
4	企画(Plan)のための技術
5	実行(Do)のための技術
6	評価(See)のための技術
	――反省力
7	仕事の土台となる「技術」
8	正確な事実の把握
	――専門的な知識・技能の獲得

時事通信社

時事通信出版局
営業企画部

〒100-0011 東京都千代田区千代田2-2-1 日本プレスセンタービル1F
Tel: 03-3501-9855 Fax: 03-3501-9868 URL: http://book.jiji.com/